

2025 年度 学修行動調査 結果報告（全学科・専攻）

2025 年 9 月

I R 委員会 / 教育・学修支援センター

【本報告書の概要】

本報告書は、2025 年度上半期に在籍している全学部生(休学者を除く)を対象として、日々の学修行動の様態や成長実感、授業内での経験や授業内容への満足度などを把握するために実施した「学修行動調査」の結果を集計、及び分析したものである。なお、調査は 2025 年 5 月～7 月にかけて、本学の LMS である Moodle を用いたオンライン方式で実施した。

まず、学生の 1 週間の時間の使い方に着目すると、授業や実験の受講時間は微減したものの、授業の予習・復習時間や授業以外の自主学習の時間が、昨年度より上昇した。なお、個人的な趣味やアルバイトといった学習外の活動に費やす時間も 2023 年度以降、増加を続けている。また、授業内での経験についても低下した項目はなく、昨年度と同水準を維持している、もしくは増加しているもので占められた。

学生が成長を実感している能力とこれから成長させたいと思う能力については、入学年度ごと(在籍学年ごと)の分析を実施しているが、昨年度から特段の差は見られず、いずれの段階においても「専門的能力」との回答が最多となった。また、上級生になるほど専門的能力の成長を実感していると考えている学生が多かった。

教育内容の満足度については全ての項目で昨年度の水準を維持するか、さらに上昇した。満足度についてはコロナ禍において一時的に低下したが、2023 年度以降は順調に回復し、その値を維持できている。これは学生と教職員双方の不断の努力がもたらしているものであり、今年度の調査においても特筆すべき結果であるといえる。

【2025 年度の回収結果と昨年度の回答率】

	対象者 (人)	回答者 (人)	回答率 (%)	※2024 年度 回答率(%)
日本語日本文学科	172	161	93.6	86.7
歴史文化学科	158	125	79.1	65.2
教育学科(※1 年生)	144	140	97.2	—
幼児教育・こども保育専攻(※2 年生以上)	141	126	89.4	76.8*
学校教育・初等中等教育専攻(※2 年生以上)	205	192	93.7	89.9*
特別支援教育専攻(※2 年生以上)	60	46	76.7	58.0*
人間社会学科	154	141	91.6	94.9
心理・福祉学科	87	83	95.4	100
スポーツ健康学科	403	241	59.8	73.7
薬学科	608	569	93.6	87.9
全学	2,132	1,824	85.6	82.4

(2025 年度調査実施期間: 5 月 19 日～7 月 4 日)

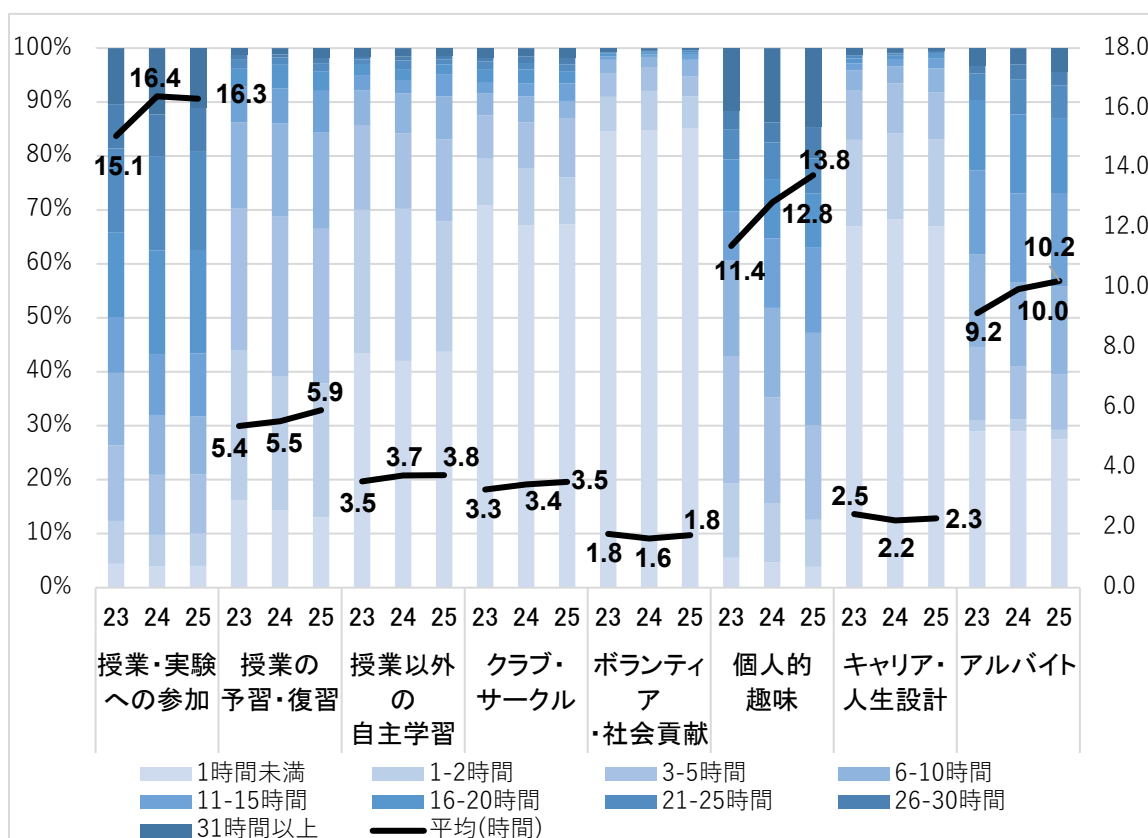
※教育学科は 2025 年度より入学試験時の専攻選択制を廃止したため、1 年生は学科全体として集計し、専攻が確定している 2 年生以降は専攻別に集計した。なお、「幼児教育専攻」と「学校教育専攻」は 2024 年度よりそれぞれ、「こども保育専攻」と「初等中等教育専攻」に名称変更している。

* 2024 年度の回答率は 1 年生を含んでいるため参考値である

【考察】

・本学では IR 委員会が主導して行う基幹 3 調査(新入生調査・学修行動調査・卒業時調査)において、回答率の向上を目的としたガイドラインを策定・運用している。今年度はガイドラインに則り、各学科・専攻の回答率の状況を鑑みた上で調査期間を当初の予定より 2 週間延長した。また、未回答者への督促については教育・学修支援センターが個別に行った他、各学科・専攻の IR 委員から、アドバイザー教員(ゼミ教員)に向けて、未回答の指導学生への回答督促を依頼した。これらの施策により、全体の回答率は昨年度より上昇し、80%代を維持することができた。

【I : 1 週間の時間の使い方(8 項目)】



【考察】

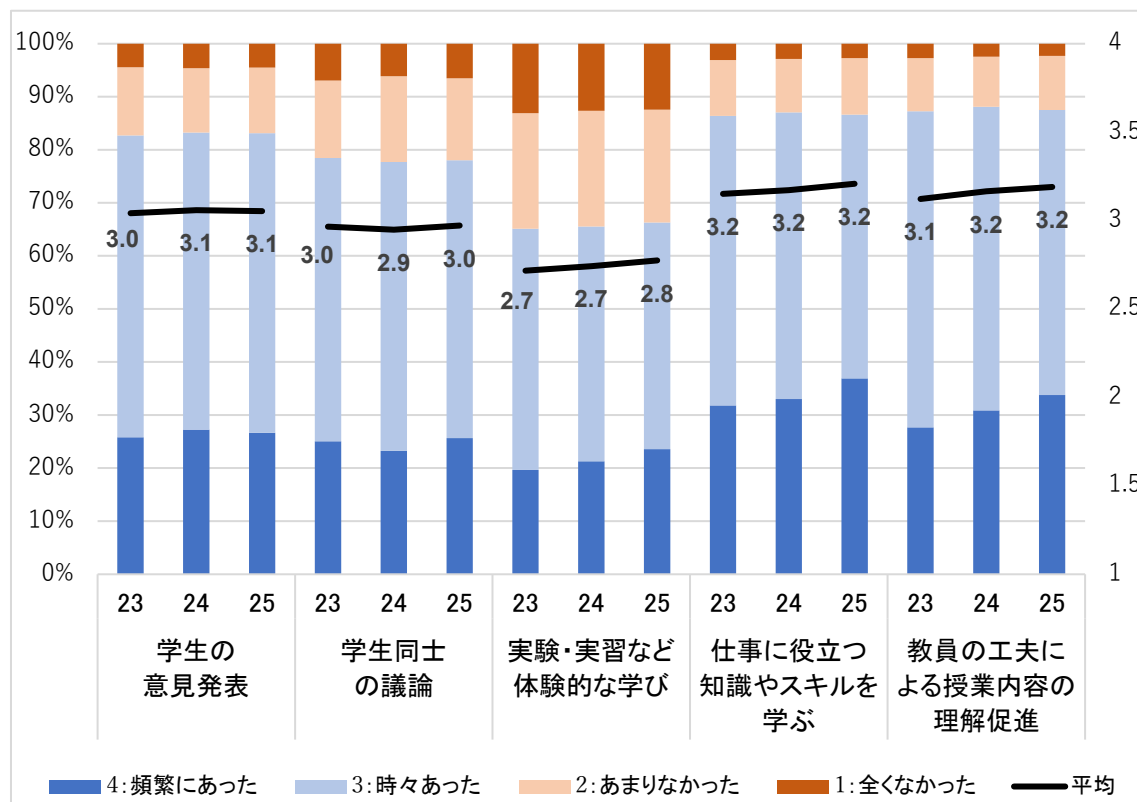
・「授業・実験への参加」の時間数については昨年度とほぼ変化はなかった。ただし、2023 年度の平均(15.1 時間)と比較すると大きく伸びており、伸びを維持できていると言える。

・「授業の予習・復習」については 2023 年度までは低下傾向が見られていたが昨年度より持ち直しの兆しを見せ、今年度は更に伸びる結果となった。

・その他の項目についても全ての項目で昨年度より増加した。その中でも、「個人的趣味」にあてる時間については、昨年度比で+1.0 時間、一昨年度比で+2.4 時間と大きな幅で増加し続けている。

また、「アルバイト」についても昨年度比で+0.2 時間、一昨年度比で+1.0 時間と年々増加し続けていることに変わりはない。

【Ⅱ：授業内での経験(5 項目)】



【考察】

・アクティブラーニングに関する設問である「学生の意見発表」「学生同士の議論」「実験・実習など体験的な学び」については、昨年度及び一昨年度と比較し、特筆すべき増減はなかった。また、「仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ」「教員の工夫による授業内容の理解促進」についても同様であった。これらの結果が示すのは、過年度より一貫して授業の質が担保されているということであり、教員の授業改善の取り組みが着実に効果を上げ続けていると言える。

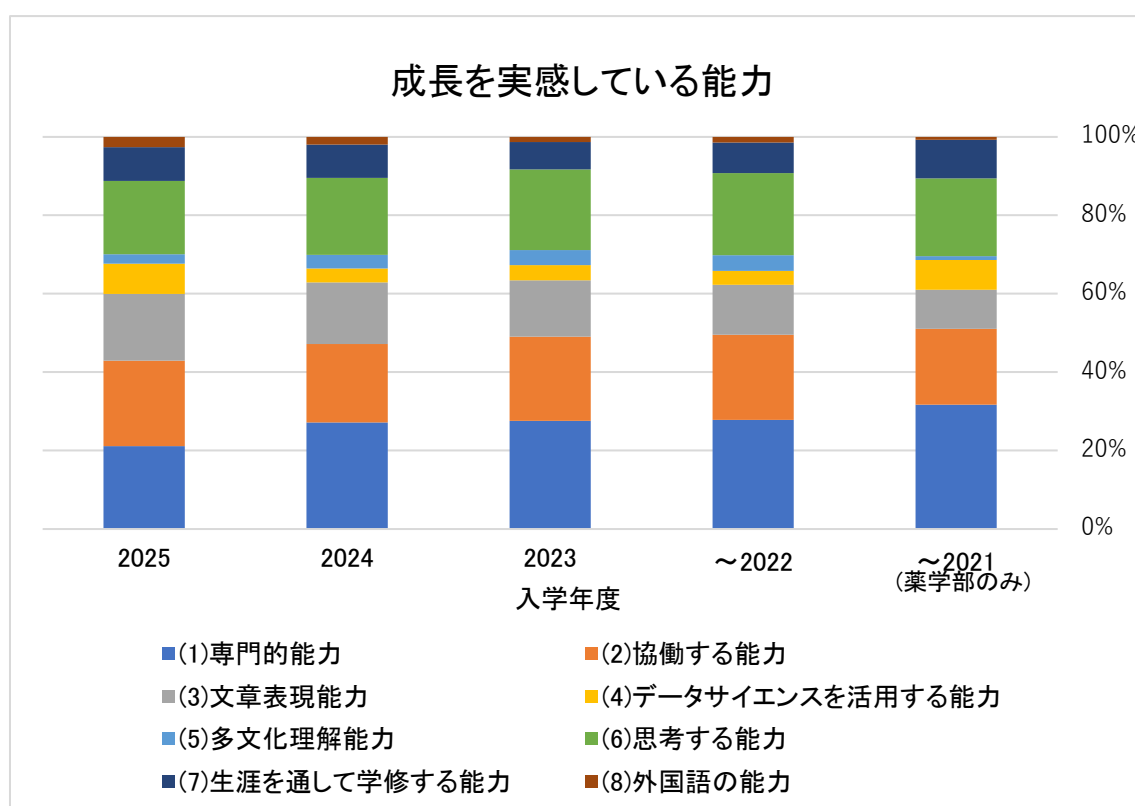
【Ⅲ：成長を実感している能力と成長への満足度】

[Ⅲ・Ⅳのグラフについての備考]

大学入学以降に成長した / これから成長させたい と思っている能力を順に 3 項目選択する方式を採った。
 なお、グラフの各項目は、回答総数(3 項目×回答者数)に占める割合(%)で示しているため、回答者全員が同じ項目を選択して回答した場合の値(理論上の最大値)は 33.3%となる。

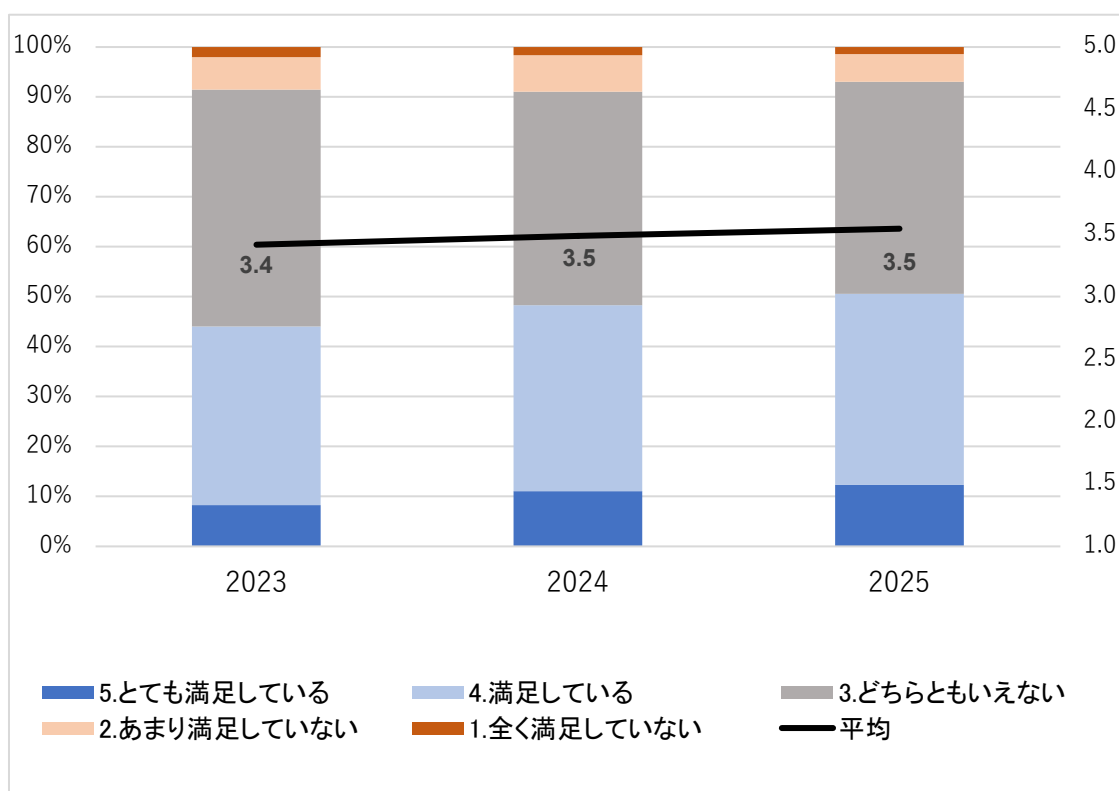
※各能力の概要・例は以下の通りである。

- (1) 専門的能力(例：専門分野についての知識や技能、将来の職業に関する知識や技能)
- (2) 協働する能力(例：人間関係を構築する能力、周りと協力して課題に取り組む能力、自らの意見をわかりやすく伝える能力)
- (3) 文章表現能力(例：レポートを書く際や試験の際に文章を論理的に書く能力)
- (4) データサイエンスを活用する能力(例：身の回りにある様々なデータを収集し読み解く能力、情報倫理を身につける能力)
- (5) 多文化理解能力(例：グローバルな問題や地域的な課題への理解や関心、異なる文化に関する知識・理解)
- (6) 思考する能力(例：様々な角度や広い視野から物事を捉える能力、解決すべき課題を発見する能力)
- (7) 生涯を通して学修する能力(例：幅広い知識、多面的な物の見方、自ら学修する習慣)
- (8) 外国語の能力(例：外国語でコミュニケーションをとる能力、外国語で読み書きする能力)



※「~2022」については薬学部の学生を除く2022年度以前の入学生を含むことを示す。グラフ右端の「~2021」は薬学部の学生のみを集計したデータであり、2021年度以前の入学生を含むことを示す。

● 現時点において自らの能力の成長度合いについてどれくらい満足していますか。

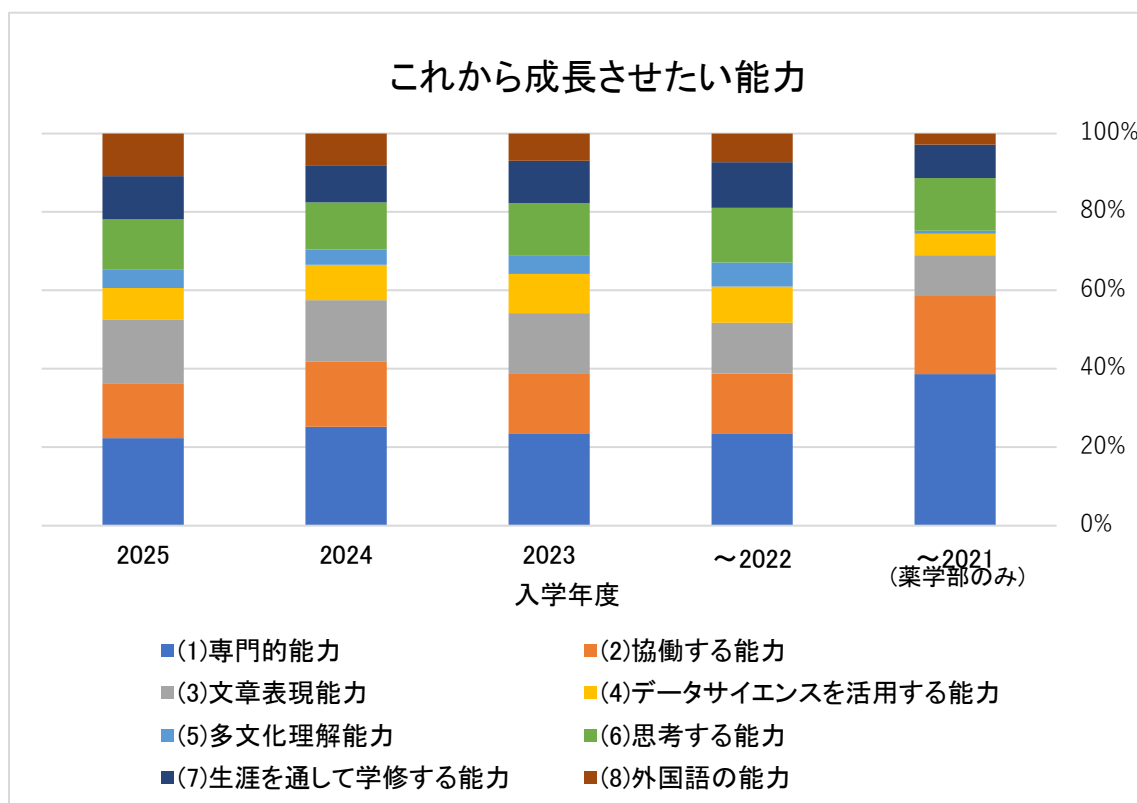


【考察】

- ・本設問は 2020 年度まで「大学入学時と比べて身についた能力・知識」として 17 項目を設定し、「かなり身についた」から「全く身につけていない」までの 5 件法で問うていた設問を、2021 年度より項目数を 8 つまで絞り込み、問い方についても自身が成長したと実感している能力の上位 3 項目を選択する方式に変更し、入学年度ごと(在籍学年ごと)の差を可視化したものである。
- ・結果的に入学年度ごとの能力の伸びの実感に大きな差は認められなかったものの、入学当初は「文章作成能力」や「外国語の能力」、「データサイエンスを活用する能力」の伸びを実感しやすく、進級するにつれて「専門的能力」の伸びが実感しやすくなる傾向が見られた。なお、この傾向については過年度と同様の結果である。
- ・「データサイエンスを活用する能力」の成長実感のピークが 1 年生時(2025 年度入学)に集中しているのは 1 年生の前期に「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」を構成する授業である「コンピュータ技術基礎Ⅰ」・「情報薬学基礎演習」を履修することが影響していると考えられる。
- ・成長度合いの満足度については昨年度と比較して平均値の上昇こそ見られなかったが、「とても満足している」が昨年度比で+1.3%、一昨年度比で+4.0%、「満足している」も昨年度比で+1.1%、一昨年度比で+2.5%と、満足群が連続して順調に増加している。

【Ⅳ：これから成長させたいと思っている能力】

※各能力の概要・例はⅢで示したものと同一である。

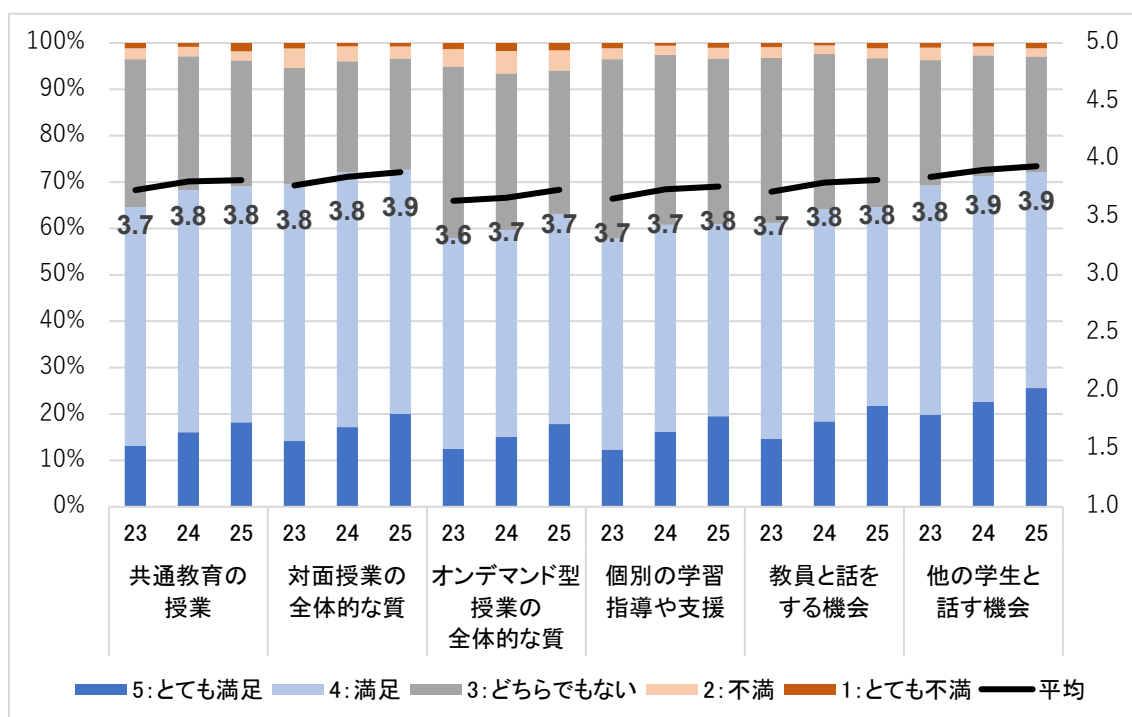


※「～2022」については薬学部の学生を除く2022年度以前の入学生を含むことを示す。グラフ右端の「～2021」は薬学部の学生のみを集計したデータであり、2021年度以前の入学生を含むことを示す。

【考察】

- ・大幅な違いはないものの、在学年数が長くなるにつれて「文章表現能力」と「外国語の能力」を成長させたいという割合が低下する傾向が見られた。これは昨年度、一昨年度と連続して見られる傾向である。いずれも、ライティングや外国語の授業時間数の減少に伴うものと推察される。
- ・その他の能力については入学年度ごとの差は見られなかった。

【V:教育内容の満足度(6項目)】



【考察】

- ・コロナ禍によって満足度は一時全体的に低下していたものの、一昨年度より回復(上昇)傾向を見せており、今年度もそれを維持している。
- ・満足度の平均が低下した項目はなく、「対面授業の全体的な質」及び、「個別の学習指導や支援」が増加していることは特筆すべき点であり、教員の授業技術や質の向上やきめ細やかな指導や支援が実践されている証左であると言える。

以上